

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02710

研究課題名(和文)ドイツ語の未来形の歴史的発達についての研究

研究課題名(英文)A Study on the Historical Development of the German Future

研究代表者

嶋崎 啓 (Shimazaki, Satoru)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：60400206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ語の未来形は以下のような段階を踏んで発達したと考えられる。1 中高ドイツ語期にbegunde/began + 不定詞が発達。その際、不定詞の動詞の意味に制限があった。2 1400年頃にward + 不定詞が発達。begunde/began + 不定詞と同様に不定詞の意味に制限があった。3 15世紀後半にwuerde + 不定詞が発達。不定詞の意味的制限がなくなる。4 16世紀にwirt + 不定詞が発達。現在の推量の用法も可能になった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ語の未来形の成立の研究においてはこれまで、werdenの法や不定詞の動詞の意味に注意が払われなかった。本研究では、werdenの直説法過去や接続法と不定詞が結びつく場合の不定詞の意味を考察することによってwerdenの直説法過去 + 不定詞からwerdenの直説法現在 + 不定詞への移行における断絶をwerdenの接続法 + 不定詞を置くことによって解消した。また、多言語においても見られる未来形が現在の推量の用法に対し、その発生の一つの可能性を提示することができた。

研究成果の概要(英文)：The German future tense has developed in the following stages:

1 'begunde/began' + infinitive developed in middle and high German. At that time, the meaning of the infinitive verb was limited. 2 Around 1400, 'ward' + infinitive developed. As with 'begunde/began' + infinitives, there were restrictions on the meaning of infinitives. 3 'wuerde' + infinitive developed in the latter half of the 15th century. The semantic restriction of infinitive was removed. 4 'wirt' + infinitive developed in the 16th century. Probability in present time was also expressed by this form.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：ドイツ語史 歴史言語学 文法化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語の未来形 werden の直説法現在 + 不定詞の歴史的成立過程においては、werden が「～になる」を意味するコプラ動詞であるにもかかわらず、なぜコプラ動詞と共起しやすい形容詞に近い現在分詞ではなく名詞的性質を強く持つ不定詞と結びついたのかが一つの解決すべき問題であった。そこで werden + 不定詞が最初は 14 世紀に werden の直説法過去 + 不定詞の形で発達したことに着目し、1200 年頃に多用されていた beginnen の直説法過去 + 不定詞がその雛形であったという仮説のもと、どのような動詞の不定詞が beginnen の直説法過去 + 不定詞および werden の直説法過去 + 不定詞において用いられたかを調べた。そこで明らかになったことは以下のことであった。

beginnen の直説法過去 + 不定詞 は「言った」のような発言や、「見た」のような知覚や、「泣いた」のような理性で制御できない感情や生理や激しい動作を表す場合が多い(その際、特に「開始」は表されない)。

werden の直説法過去 + 不定詞も発言や知覚や理性で制御できない動作を表す場合が多い。

2. 研究の目的

werden + 不定詞 が初めは werden の直説法現在ではなく、直説法過去によって作られ、また不定詞の動詞が特定の意味を表すものに限定されていたというところから、いかにして werden の直説法現在が用いられるようになり、また不定詞の動詞の意味的な制限がなくなったのかを実証的に明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

werden + 不定詞が発達する初期新高ドイツ語期(1350~1650年)の資料を用いて、werden の法と時制および不定詞の動詞の意味の区分によって werden + 不定詞の発達の過程を明らかにする。すでに 1200 年頃の資料には werden + 不定詞はほとんど現れず、15 世紀初頭の Ring『指輪』において werden の直説法過去 + 不定詞 が多用されながら、werden の直説法現在 + 不定詞 はあまり見られないことが分かっているので、これまでほとんど研究されなかった、未来形の発達と werden の接続法 + 不定詞 との関係に注目する。

4. 研究成果

werden + 不定詞の用例数の調査結果は以下の通りである。wirt は werden の直説法現在形、ward は直説法過去形、werde は接続法 1 式、würde は接続法 2 式を表す。

	Tristan(1210年頃)	Ring(1400年頃)	Tristrant(1484年)	Fortunatus(1509年)	Faustus(1587年)
wirt + 不定詞	0	9 (13%)	7 (14%)	20 (27%)	58 (66%)
ward + 不定詞	0	50 (72%)	20 (40%)	22 (30%)	0 (0%)
werde + 不定詞	0	4 (6%)	4 (8%)	3 (4%)	7 (8%)
würde + 不定詞	0	6 (9%)	19 (38%)	28 (38%)	23 (26%)

(1) Ring『指輪』の werden + 不定詞

Ring『指輪』において ward + 不定詞が、知覚や発言や理性で制御できない感情・生理や激しい動作を表すことは研究の始まる前に明らかにしていた。それ以外の werden + 不定詞の形式に関しては以下の通りである。

wirt + 不定詞

『指輪』の wirt + 不定詞には知覚を表す例や理性で制御できない生理現象を表す例がある。

Die **wirst** du nach enander **sehen**, / Iecleicheu besunder schiere, / Mit ier gepotten, der sein viere (Ring 4575-4577) (お前〔ベルチ〕はそれ〔正義の下の十の美德〕をそれぞれ順次、それぞれに備わる四つの命令とともに**すぐ**に**知る**ことになる)

Und chümpft er in seinr herren land, / Daz pläterlein zerprist ze hand, / Daz pluot **wirt** hin so **fliessen** (Ring 2239-2241) (彼〔ベルチ〕が自分の領地に入り、その結果浮き袋が即座に破ければ、**血が流れ出す**だろう)

他に、次ような一般的な動作や現象を表す例もある。

So **wirt** er mich leicht **nemen** aus / Und fteren mich zuos arzetz haus / vil schier und auch geswinde (Ring 1995-1997) (そうすれば、お父さんは私をおそらく**連れ出して**、医者の方に**すぐに**急いで**連れて行く**だろう)

このように、『指輪』の wirt + 不定詞は、ward + 不定詞との意味的な連関を保ちつつ、そこから離れた用法を増やし始めている。

werde + 不定詞

『指輪』の werde + 不定詞は次のように間接話法や目的分などで現れる。

Ir seit so gar ein biderman, / Daz ich dehainen zwivel han, / Wie iers jemant fürbas **sagen** / **Werdint**, mein vil sendes klagen. (Ring 2039-2042) (あなた〔医者〕は非常に誠実な人なので、あなたがそれを、つまり私の苦しい嘆きを、他の誰かに**言う**だろうなどという疑い

を私は抱きません)

Dar umb so schült ier gerne / Üben euch in sölhen dingen, Daz euch dest ofter **werd gelingen** / In ernst und auch in stritten. (Ring 905-908) (それゆえ、真剣勝負や戦闘においてもそれだけいっそう多くあなた達が**成功**するために、あなた達はこのようなことにおいて練習した方がよい)

würde + 不定詞

『指輪』に現れる würde + 不定詞の多くは、「もし～だったら～だろう」という非現実の仮定の事態において前提部を表す場合も、帰結部を表す場合もある。

Waz hulffi, ob du dir die welt / Gewunnen hietst mit allem gelt / Und dein sel **wurd** leiden **haben**? (Ring 2537-2539) (もしお前がお金をすべて使って世界を獲得し、お前の魂が苦難を受けるとすれば、何の役に立つだろうか)

Der nicht wolt lernen fürsich sehen, / Dem **wurd** ze gleicher weis **geschehen**, / Sam der fleugen gschach hie vor / Pei der weisen ämbess tor (Ring 5002-5008) (先を見ることを学ぼうとしない者には、かつて賢明な蟻の家の前で蟻に起こったのと同じことが**起こる**だろう)

(2) Tristrant 『トリストラント』の werden + 不定詞

『トリストラント』についても、ward + 不定詞が特定の限定された意味を表すことは研究の開始前に明らかにしていた。

wirt + 不定詞

『トリストラント』の wirt + 不定詞は、ward + 不定詞と同様に、知覚や発言や理性によって制御されない動作を表す場合がある。

jch wil dir den held bringen. dem truchseß zu schaden auf ein vermessen streit. darinn du selbs **sehen** vnd **hoeren wirst**. das der betrieger den wurme nicht bestanden noch ertoet hat. (Tristrant 909-912) (私〔イザルデ〕は内膳頭をぎゃふんと言わせるために、思い切った決闘を設定して、あなた〔父王〕のもとへその勇者〔トリストラント〕を連れてきましょう。そこであなたはご自身で、その詐欺師〔内膳頭〕が竜を打ちましても、殺してもいいことを、**見て、聞く**ことでしよう)

Ey wie ein schoene ere eüch das wirt. wo man in den landen **sagen wirt**. eürs vatter schüsseltrager hab eüch mit listen vnd vnwarheyte eürem vatter abgeredt. (Tristrant 863-866) (あなた〔イザルデ〕のお父様の皿運び〔内膳頭〕が策略といかさまによってあなたのお父様からあなたを娶ったと人々が国中で言うとしたら、それはあなたに何とご立派な名誉となるでしょう)

jecz wirt jch kalte als ein eyß. vnd wil also erfriern. yecz **wird** jch **brynnen** als ein feür. vnd dringet der schweiß durch alle meine gelyder. (Tristrant 1192-1194) (今私〔イザルデ〕は氷のように冷たくなり、そのまま凍りそうかと思うと、またすぐに火のように**燃えて**、汗が体中から噴き出す)

しかし、一方、『トリストラント』の wirt + 不定詞には、特定の限定された意味を表さない例もある。

bitt mit vnderthenigkeit. mich ewer vrlaube haben lassen. auch darzu helffen mit gesinde. vnd wz mir zu soelicher raiß noturfft **sein wirt**. (Tristrant 87-89) (私〔トリストラント〕にあなた〔リバリン〕が暇を与え、従者およびそのような旅で私に必要となり**そう**なものによって援助下さいますよう恐れながら御願ひ申し上げます)

『トリストラント』の wirt + 不定詞は ward + 不定詞との意味的連関を比較的よく保っているが、sein を不定詞としてとるように、新たな用法を可能にしている。

werde + 不定詞

『トリストラント』の werde + 不定詞は、『指輪』と同様、間接話法やまだ生じていない出来事を表すのに用いられる。

Jch sihe wol du beleibest. vnd meyn meyn herr künig Marchs **werde** frey vor dyr **sein**. vnnnd du habest des zinses genuge. wüerst auch füran nicht mer vndern dann dein übermut der hat dich gefellet. (Tristrant 376-379) (お前〔モルオールト〕が残ることが私〔トリストラント〕には分かった。また、我が君マルク王がお前から自由になる**だろう**し、お前は貢ぎ物を十分受け取り、この先これ以上は要求しないだろうと私は思う。というもお前の尊大さがお前を倒したのだから)

Nun müssen wir je durch alle land faren Wo man mit keylen vnnnd pferden hin mage. suchen ein frauen wo wir dye halt **vinden werden**. (Tristrant 616-618) (さあ、我々はあらゆる国々を、船や馬で行ける所であればどこでも巡り、一人の夫人を、我々がその人をどこで**見つける**ことになろうとも、探さねばならない)

ward + 不定詞との関連で言えば、『トリストラント』の werde + 不定詞は『指輪』と同様、特定の限定された意味を表さない。

würde + 不定詞

『トリストラント』の würde + 不定詞は、『指輪』と同じく、非現実の仮定に用いられ、前提部にも帰結部にも現れる。(帰結部の方が数が多い。)

Her Tristrant gürtet sein schwert vmb sich vnd stellet sich zu woer ob in yemand nach

reyten wurd. das sy czu streit waren bereyt. (Tristrant 2238-2239) (トリストラント殿は剣を帯び、誰かが彼らを追って馬で来る場合に戦う準備ができているように防御の態勢を整えた)

solt ich sy tod wissen. vnd mich lebend. wie moecht jch ymer on sy geleben. jch wurde mich selber toedten. (Tristrant 2252-2254) (もし彼女〔イザルデ〕が死に、私〔トリストラント〕が生きていると私が知れば、どうして私は彼女なしにこの先生きられようか。私は自ら命を絶つだろう)

『トリストラント』の würde + 不定詞は間接話法で用いられる例も多い。

Jch [...] meyn meyn herr künig Marchs werde frey vor dyr sein. vnnnd du habest des zinses genuge. wüerst auch füran nicht mer voderen (Tristrant 376-379) (我が君マルク王がお前から自由になるだろうし、お前は貢ぎ物を十分受け取り、この先これ以上は要求しないだろうと私は思う)

würde + 不定詞については、不定詞の動詞の意味に制限がないことが特に重要である。

### (3) 16世紀の wirt + 不定詞

Fortunatus 『フォルトウナートゥス』の wirt + 不定詞

『フォルトウナートゥス』の wirt + 不定詞においては不定詞の動詞が、知覚や発言や理性で制御できない動作を表すものに限定されず、多様な動詞が用いられる。

da hat er zu rechten mit ainem grafen umb ain grosse sach / umb land und leüt / und würt kostlich tzu dem rechten kommen / unnd alle seine diener mit ym nemen / dann er weyßt wol / das der graff von Sant Poll / so wider yn ist / auch kostlich kommen wirt. und die weil er also da sein wirt / so wil er die vier frauen diener lassen verschneyden (Fortunatus, S. 16) (そこで彼〔クレーヴ公〕は土地と人民をめぐる訴訟である伯爵と裁判を受けねばならず、その裁判に派手な格好でやって来て、彼のすべての従者を引き連れて来るだろう。というのも、彼〔クレーヴ公〕は、自分に敵対しているサン・ポール伯も派手な格好で来ることを知っているからだ。彼〔クレーヴ公〕はそこにいるあいだに、奥方つきの四人の従者を去勢させるつもりだ)

他にも、das werden ir essen / und darauf ain schlaflin thun (それをあなたは食べ、そのあと睡眠をとりなさい) のように、主語が2人称で「命令」を表す例もある。

『ファウストゥス』の wirt + 不定詞

『ファウストゥス』にはもはや ward + 不定詞の例が現れない。それに比例するかのよう、wirt + 不定詞の例が非常に増えている。

vnd wirst eben der recht seyn / wohin ich nit (wil) ich dich meinen Botten senden (Faustus S. 16, Z. 5-6) (そして〔あなた、ファウストゥスは〕まさに適当な人間だろう。私〔メフォストフィレス〕が行きたくない所へはあなたを使者として送ろう)

『ファウストゥス』には、これまでにない新しいタイプの wirt + 不定詞も現れる。

dieweil du solche Vntrew mir beweisest / dergleichen du gewiß auch andern thun / vnd schon gethan haben wirst / soll dir darfür gelohnet werden (Faustus S. 99, Z. 12-14) (お前〔農民〕はそんな不実を俺〔ファウストゥス〕に示し、きっと他の人にも同様のことを行うだろうし、すでに行っただろうから、それ相応の報いを受けさせてやる)

上の例は、werden の直説法現在形が結びつく不定詞が完了不定詞となっており、いわゆる現代ドイツ語の文法で「未来完了形」と呼ばれるものであり、過去の事態についての推量を表す。

『ファウストゥス』には法助動詞を不定詞とする例もある。

Also wird die Seel deß Verdampften jmmerdar brennen / vnd sie doch das Feuer nit verzehren koennen / sondern nur mehr Pein fühlen. (Faustus S. 37, Z. 29-31) (そのように地獄に落ちた者の魂はずっと燃えて、火がそれを焼き尽くすことはできず、ますますただ苦しみを感じるだけだ)

また、不定詞が werden の例もある。

doch wirt er dir nicht zu Willen werden / biß erst nach meinem Todt (Faustus S. 112, Z. 26-27) (しかしそいつ〔霊〕は私〔ファウストゥス〕が死ぬまでお前の意志通りにはならない)

### (4) werde + sein および würde + sein

werden が接続法の場合には sein を不定詞とする例はすでに『トリストラント』においてもある程度の数で現れる。

Jch sihe wol du beleibest. vnd meyn meyn herr künig Marchs werde frey vor dyr sein. (Tristrant 376-377) (お前〔モルオールド〕が残ることが私〔トリストラント〕には分かった。また、我が君マルク王がお前から自由になるだろうと私は思う)

wenn du nymbst villeichte für das du jr laide gethan hast an jrem oeheim. ob sy des gegen dir ingedenck sein wurde. das jr denn nicht so wol miteinander leben wurdet als bilich war. vnd sein solt. (Tristrant 1050-1054) (あなた〔トリストラント〕が彼女〔イザルデ〕の叔父のことで彼女を苦しめたことを彼女があなたに敵意を持って記憶にとどめるなら、あなた達はあるべき形でむつまじく共には暮らせないだろうと思うならば)

直説法現在の werden よりも接続法の werden が多く sein と結びついて用いられたということは、先に werde + sein や würde + sein という形で werden が不定詞 sein と結びつくことが一般化し、そのあとで直説法現在形の werden が sein と結びつくようになったという筋道があったのではないかと想像される。

(5) 16世紀の werde + 不定詞および würde + 不定詞

『フォルトゥナートゥス』には ward + 不定詞では見られないような、多様な動詞の不定詞から作られた例が見られる。

so werden ir innen das der künig und die künigin ain freüd darab **nemen werden** / dester meer begir **haben** / ir schoenen tochter ainem solichen schoenen jüngling zu geben. (Fortunatus, S. 174 f.) (そうすれば、〔英国の〕王も王妃もそれに喜びを得て、いっそう自分たちの娘をそのような若人に嫁がせるといふ願望を持つだろうことがあなた〔キプロス王〕に分かるでしょう)

[...] und bevalch in sy [...] solten auch niemand sagen von dem seckel und in so lieb lassen werden / noch nieman so hold gewinnen / ob sy och weiber überkamen die sy vast **liebhaben wurden** / noch so soelden sy yn nichtz von dem seckel sagen (Fortunatus, S. 122 f.) (〔フォルトゥナートゥスは〕彼ら〔息子た〕に命じて、誰にも財布のことは言わず、財布のことをうらやましいとは思わせてはならない、誰もそれほどまでに好きになってはならない、もし妻を娶って、その人のことがとても好きになっても、それでもその人に財布のことを言っていないと言った)

以上、werden + 不定詞は、まずは werden の直説法過去形によって多く作られ、この場合、不定詞の動詞は特定の意味を表すものに限定されており、不定詞が sein となる例は現れない。それに対し、werde + 不定詞や würde + 不定詞においては、すでに『指輪』の段階で、限定されない意味の不定詞が用いられている。したがって、werden + 不定詞は形式の面ではまず ward + 不定詞の形で発達したが、意味の面では werde + 不定詞および würde + 不定詞によって拡張した。特に、ほぼ間接話法に使用法が限定されていた werde + 不定詞よりも、非現実の仮定を表す würde + 不定詞は多くの場面で用いられ、実際、用例数も早い段階から比較的多いということが分かった。

このように見ると、現在の事態における推量を表す未来形は次のような経緯で発達したのではないかと考えられる。すなわち、

ward + 不定詞が発達。不定詞の動詞が意味的に制限されている。

würde + 不定詞が発達。不定詞の動詞の意味的制限がなくなり、静的な状態を表す動詞も用いられるようになる。

wirt + 不定詞が発達。基本的に未来の事態を表すが、静的な状態を表す動詞の不定詞と結びつく場合に、現在の事態を表す用法も可能になる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 嶋崎啓	4. 巻 83-1/2
2. 論文標題 現在の事態における推量を表す未来形成立の経緯	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化	6. 最初と最後の頁 36-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 嶋崎啓	4. 巻 82-3/4
2. 論文標題 ドイツ語未来形の歴史的発達におけるwuerde + 不定詞の位置づけ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化	6. 最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 嶋崎啓	4. 巻 29
2. 論文標題 日独語対照の観点から見た語りの現在形	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西日本ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 嶋崎啓	4. 巻 67
2. 論文標題 ドイツ語の現在完了形と過去形の意味的相違と未来形と現在形の意味的相違の並行性について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東北大学大学院文学研究科研究年報	6. 最初と最後の頁 87-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 嶋崎啓
2. 発表標題 ドイツ語の自由間接話法の英訳と仏訳
3. 学会等名 シンポジウム「語りと主観性 自由間接話法とその他」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 嶋崎啓
2. 発表標題 ドイツ語の現在完了形と過去形の意味的相違と未来形と現在形の意味的相違の並行性について
3. 学会等名 日本独文学会2017年度春季研究発表会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----